



ホスピタリティの心が広げる デザインの可能性



ホスピタリティとは、
一歩先のクリエイティブを考えること

中村拓 ホスピタリティってサービスの概念だと思のですが、僕はそれを建築というものを通していかにも形にすることを考えています。たとえば2006年にオープンした「ロータスビューティーサロン」(三重県桑名市)は330㎡の巨大な美容院ですが、ここではまずお客さんにとって心地よい空間を考えた時、プ



ライバート感覚になれる個室に行き着きました。それから、お客さんの顔を中心に美容師さんがグルグル回る最少回転半径を基本単位として、そこでもてなしを考えることから全体を作っていく。つまり建築と人がくすぐり近いうちから設計をスタートする。そういう作り方って実は茶室がそうなんです。茶室は書院の大広間で茶事を行っていた時より、四畳半ほどの小さな茶室を確立してから急速に産化した。人と人、人と素材、これらの距離が近くなったからこそ、繊細なもてなしの文化が生まれ、建築も変化していった。
中村典 おもてなし、ホスピタリティって、クリエイティブそのものですね。この前、「千里リハビリテーション病院」(大阪府箕面市、2007

年11月開業)のプロジェクトに参加した時も実感しました。「千里リハビリテーション」は、療養中のリハビリテーションに特化した専門病院ですが、クリエイティブ・ディレクターの佐藤可士和さんが「リハビリテーションリゾート」というコンセプトを出しました。建築、インテリアから施設のサービスにいたるまで一貫して、通常の病院っぽくない、快適な空間をめざしたんです。その中で、僕はオペレーションに関わるアメニティや、オープニングパーティの準備など、どちらかというとホテルライクなものを担当しました。そのプロジェクトの中で感銘を受けたのが、本のプロデュースをしている福光華さんが手がけたリハビリのための図書室。そこはテーマ別にコーナーが分かれていて、「あの頃の自分」というコーナーには加賀まりこの若い頃の写真集が置いてあったり(笑)。

中村拓 いいですね(笑)。元気がでそう。
中村典 他にも昆虫の本、旅行の本など夢のあるすばらしいセレクトなんです。なにより感動したのは、本の背の下にコーナー別のカラーステッカーが貼ってあったこと。同じ色のコーナーに戻してください、という目印です。草履関係はゴールドにするなど、シャレも効いている。オペレーションとしても便利だし、使う側もわかりやすく、さらには色の識別のリハビリにもなる。使い方だけではなく、その先のことも考えられていて、すごく感動しました。

中村拓 人の心の動きや行動を予測して考えているからできることなんですよね。
渋谷僕は自分の作品をつくる時にはホスピタリティということを考えることはありません。



現在使えるテクノロジーとサウンドの可能性を徹底的に追求することが重要だからです。ただ、ホスピタリティとの関係で言えば公共的、恒久的な言わばオープンな空間とサウンドの関係には様々な可能性があると思っています。昨年、貫川橋作さんがRVVに作った建築にサウンド・インスタレーション作品をインストールすることになっているのですが、色々考えているところです。

一般に空間にサウンド、というと、人が通るとそれに反応して音が鳴るような装置があまりすよね。それは、1対1のインタラクションですが、現実にはそんな単純な関係なんてなくて、世界は常に多層的でポリフォニックな時間が流れている。多層的な世界の中であって1対1の関係をつくるなら、「1」の質が重要になるはずなのに、インタラクトすることに重きが置かれ

ることが多い。僕はそうした素朴さに興味がありません。実際、テクノロジー・アートの中でインタラクションの占める位置というのは後退していて、遊ぶフェーズに移っています。

恒久的な音のインストールとして面白いと思っているのは、自律性を持って変化する、見えないうサウンドのペットのようなものです。たとえばホテルだったら、ロビーに常にかすかな音が生き物のように動いていて、微細なスパンで運動、成長していくような。それは余剰なものですけど、時間の多層性のメタファーとしても面白いと思っています。

中村拓 たしかに、建築家は音のことまでは考えていない。外観のアザインに重きを置きすぎていたというか、実際に何年か前にはハコモノ行政と批判されたように、外観パッケージだけをデザインして、自身のソフトウェアのことを

全く考えていないような建物がたくさんできました。それだと、インテリアや住みやすさというところまでは立ち入れないし、音環境みたいなことには全く考えが及ばない。

渋谷あと建築の人は、音楽との関わりで言うところ、BGMという考え方が未だに多いでしょう。僕は空間に対するBGMという関係は一義的であり面白くないので引き受けないようにしています。

最近、歩行者用横断歩道のサウンド、いわゆる「通りゃんせ」に代わる音楽を作曲して欲しいという依頼があって、これは作曲も完了して今年の3月まで、銀座のある交差点で実演中なのですが、この場合もBGMではつまらない。ではBGMとは何かということなのですが、信号に付帯したスピーカーから例えばピアノの音が聞こえてきたら、それはただのBGMです。でも